

家抜け

川崎ゆきお

今にも倒れそうな木造二階建ての一軒家。通りに面して門があるが、開いている。閉めることができるのだが、鍵が壊れているようだ。表札には（向井）とある。スーツ姿の青年が門柱を見ている。インターフォンらしいものはない。開いているのだから、玄関先まで入り込んでもいいと受け取った。雑草に覆われているが、石畳がある。そこだけはおろして草は芽を出さないと、隙間からは出ている。だから、石畳の石は雑草によって囲まれ、四角い箱のように見える。石畳には意味がある。雨でもそこだけぬかるまないためだ。青年は庭を見ながら玄関先まで行く。そのとき、石灯籠を見ている。かなり大きい。これも背の高い雑草の中に隠れていた。青年は大きな鞆を持っている。出前持ちのような、四角いトランクだ。近くに車を止め、ここまで来たようだ。玄関にはボタンがある。青年は押す。かすかに、ピンポンと聞こえる。室内の何処かで鳴ったのだ。これは電池があり、まだ生きているようだ。「どなたさんかな」 玄関の向こうから老人の声。「いいものを持ってきました」「押し売りかな」「いえ、お見せするだけです。決して押しません」「開いているからどうぞ」 鍵は掛かっていないようで、青年は軽く横へ引くと戸が滑った。「お邪魔します」 青年は出前持ちのようなトランクを開け、中から壺を取り出した。「靈感商法の、違う」青年は言い違えた。「靈感あらたかな壺です」「いくら」「三百万」「じゃ、置いていって」「はあ」「売りに来たんでしょ」「はい」「じゃ、置いていって」「まだ、靈感壺の説明をしていますが」「大体分かるから、置いていって」「あ、はい」 青年は壺を廊下の上に置いた。「ありがとう」老人は礼を言う。「はい」「じゃ」 老人は壺を持って奥へ引っ込んだ。「あのう」 老人は返答しない。「代金を」 老人は返答しない。青年は靴を脱いで、上がろうとしたが、許可を得ていない。三和土まではいいが、廊下に足を乗せると、室内に入ったことになる。しかも許しも得ず。「入りますよ」 青年は一応声をかけた。老人は返答しない。青年は靴を脱ぎ、廊下に上がり、障子や襖を次々に開けた。二階にも上がった。「やられた」 家具は何もなく、畳も取り払われている。空き家なのだ。「家抜けか」 了